

平成23年3月

# 松永慎司 学位論文審査要旨

主 査	清 水 英 治
副主査	福 本 宗 嗣
同	大 坪 健 司

## 主論文

緑膿菌産生クオラムセンシング分子ホモセリンラク トンの肺腺癌細胞NKG2DL発現に及ぼす影響についての検討

(著者：松永慎司、千酌浩樹)

平成23年 米子医学雑誌 掲載予定

# 審査結果の要旨

本研究は緑膿菌が産生するクオラムセンシング分子3-O-C<sub>12</sub>HSLが肺癌細胞の細胞表面 NKG2DリガンドであるULBP2だけでなくADAM17の発現を誘導すること、さらには誘導されたADAM17が癌細胞表面結合ULBP2を可溶化することを示した。その結果、緑膿菌感染による宿主免疫能低下の新たな機序が明らかとなり、緑膿菌感染による病態を制御することにより、肺癌患者の予後を改善する可能性が示された。本論文の内容は、緑膿菌感染による免疫能低下の制御を標的とした治療薬開発の可能性を示唆したものであり、明らかに学術の水準を高めたものと認められる。